

寛永三馬術

講談名作文庫 17

寛永三馬術

昭和51年7月10日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112 振替 東京 8-3930

電話 東京(03)945-1111(大代表)

編集 講談社出版研究所

印刷 廣濟堂印刷株式会社

製本 株式会社国宝社

Printed in Japan ©KODANSHA 1976

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

講談名作文庫

17

寛永三馬術



講談社

本シリーズは、昭和29年に小社より刊行された『講談全集』の文庫版選集です。今回の刊行にあたって現代表記に改めました。

〈編集部〉

目次

將軍家馬術をためす……………	九
自慢の馬術者すってんどう……………	一四
あいやしばらくと現れたは……………	二一
乗りも乗ったり馬術のほまれ……………	二八
重役どもは盲目かつ……………	三五
螢侍とは貴様のこと……………	三九
快仲間その名は度々平……………	四五
口も八丁手も八丁……………	五四
たくあんの大手柄め手ぜめ……………	六一
先んずれば人を制す……………	六九
平九郎生駒家を浪人……………	七四
万事は度々平の胸に……………	八〇

見るは法樂ほつらく見られるは因果……………三

だんなつ馬の尻けつがつかえます……………九一

時節待つ間の厩うまや仲間……………九六

大飯食おほめじくらいの仲間和田平……………一〇三

將軍家へけんか腰……………一〇八

馬の耳にお説教……………一一四

指南番ならぬ葱南蛮……………一二七

騒さわぎをよそにおおいびき……………一二五

度々平悍馬かえげを取りおさえる……………一二九

霞かすみ隠れ玉たま隠れの秘術……………一三四

千石が一粒かけてもおことり……………一三八

若殿花嫁を見て氣絶……………一四三

酒のいわせる惡口雜言……………一四六

知るや知らずや勇士の心中……………一五三

ややつ武士の面体めんたいを傷つけたかつ……………一五八

取れば憂し取らねばもののかずならず……………一四

かかあ天下に空つ風……………一七

郷に入つては郷にしたがえ……………一七

口ほどもねえ駄さんびん……………一八

ほうびのしるし、家宝の印籠……………一九

町奉行びつくりぎようてん……………一四

無実の罪に召し捕られる……………一九

小の虫を殺して大の虫を助ける……………二七

母の一念、かけこみ訴訟……………二〇

由緒を語る系図の一卷……………二五

賄賂などとはまっぴら……………三一

仲間から一足とびに八百石……………三四

立て札をたてて接待酒……………三八

七人連名の果たし状……………三三

母上、なにゆえのご自害ぞ……………三九

一騎討ちに助だちは無用……………	二四
日本一の名人あらそい……………	二五
三名人義兄弟の誓い……………	二六
涙をさそう師弟の情……………	二九
闇討ちとは卑怯千万……………	二五
寸善尺魔は世のならい……………	二八
盃 さかずき に散るさくら花……………	二四
血相かえるいざり乞食……………	二〇
市兵衛悲愴の最期……………	二三



將軍家馬術をためす

慶長^{けicho}、元和^{げんwa}両度の合戦によって世は徳川のものとなり、槍はなげしに弓は袋という、泰平の御代とはなりましたが、武芸武術はいよいよよきかん、とりわけ三代將軍家光公は、ことのほかこの道にご執心^{しゆしん}でございます。

したがいましてこの時代には、劍術では柳生宗矩^{しゅうせいむねのり}、宮本武蔵^{みやもとむさし}、槍術^{やりじゆつ}では高田又兵衛^{たかたまたへいゑ}、笹野権三^{ささのこんざう}郎^{らう}、柔術では関口弥太郎^{せきぐちやいたろう}、渋川伴五郎^{しぶがわばんごらう}などという、幾多の名人上手^{めいじんじやうず}が輩出いたしました。が、馬術におきましても、曲垣平九郎^{まがきへいくわう}、向井蔵人^{むかいくらんと}、筑紫市兵衛^{つくしいちべゑ}という三人の名人が現れ、寛永の三馬術とたたえられました。

なかでも曲垣平九郎^{まがきへいくわう}、愛宕山^{あたごやま}の石段、百三十余段を乗りあげ乗りおろして、將軍家の御感^{ごかん}にかない、家光公から日本一とおほめのお言葉をとまわりました。

さて、時は寛永十一年正月の二十八日、この日は二代將軍秀忠公のご命日とて、時の將軍家光公は、亡き父君の菩提^{ぼだい}をとむらいますため、芝三縁山増上寺^{しほさんぞうじ}へご参拝、おごそかな法要をいとなまれました。

とどこおりなくご法要もあいすみ、ゆきはお駕籠^{かご}でございますでしたが、お歸りには特に馬をひけとのご上意^{じやうい}。家光公はゆうゆうと愛馬にまたがり、お氣にいりの旗本十六騎が、いずれも馬上に

前後をかため、そのうしろには、三十余名の大名小名、さらにそのまた家来と、大勢のお供をしたがえまして、お成門をおでましになり、愛宕山田福寺の下へとさしかかってまいりました。

おりしも吹きおろす風は、耳もちぎれるばかりの寒風でございますが、えもいわれぬ馥郁たる梅花のかおりが、この寒風に乗ってただよつてまいります。思わず馬足をとめられた家光公、山上を仰ぎ見ますれば、南に面した山の中腹から頂上へかけて、源平咲きわけの梅花がみごとに咲きそろい、ひとしおの風情でございます。しばらく見とれておられた將軍家、

家「誰ぞある、まいれ」

とのお沙汰に、はつと答えて松平紋太郎、青木清太夫、馬からひらりひらりと飛びおりて御前へ伺候。

紋「なにか御用にございまするか」

家「紋太郎、清太夫、あれを見よ、よい梅じゃ、一枝手折れ、城中へ土産にいたすぞ」

紋「へへっ、かしこまりました」

と兩人袴の股だちを取つて、ばらばらつとかけていこうといたしますと、

家「待て待て、紋太郎、清太夫、しばらく待て……そのほうどもはなんで供いたした」

紋「はっ、騎馬にてお供つかまつりました」

家「騎馬で供いたしたからには、騎馬で乗りあがね」紋「ははっ」

といったが紋太郎、清太夫、思わず顔見合せて、口にはいわねど、

清「おい紋太郎」紋「うむ」

清「どうする」

紋「たいへんなことになったな、武士たるべきもの、戦場へでて討ち死には覚悟だが、坂から落ち死には心細いな、どうしよう」

清「どうしようといつて、命あつてのものだね、畑あつての芋種いまだねということを申するが、なにぶんにもこれは命がけだ。一つここはごまかして逃げよう」

紋「どういうふうにごまかす」

清「これは病氣になるよりしかたがない、上さまにじきじきに申しあげたとてお用いはなからう。年は若い、老中松平伊豆守信綱、あの男は話せるよ。どうだ、病氣になろう。病氣病氣」
紋「うむ、それもよからう」

目でこれだけの相談をしたのですから、昔の人はえらかったもの、御前はていよく、かしこまりましたとお受けして、そのまま松平伊豆守の前へ、

紋「うーむ」 清「うーむ」

うなり声をたててやってきました。伊豆守信綱これを見て、ははあ病人になったなと、知恵伊豆といわれたほどのかた、早くも察して、

伊「ご両所、いかがいたした」

紋「おそれながらご老職に願います。ただいま上さまのご上意にて、山上の梅花を折り取れとのごにござりまするが、なにぶん腹痛はなはだしく勤まりかねますれば、御前ていよろしく……」

伊「それはそれはご心配なこと、ご病氣とあらば、是非もござらぬ。そうぞうご帰邸の上、薬用お手当をなすつてよろしかろう、上さまにはよしなにそれがしからおとりなしをいたす」

紋「なにぶんよろしくお願い申しあげまする」

と両人は、ほうほうのていでここを立ち去りました。

將軍家は待てど暮らせど、紋太郎、清太夫の両名が出てまいりませぬから、

家「紋太郎、清太夫、支度が長いぞ、いかがせしぞ」

この時、伊豆守信綱お側にすすみ、

伊「おそれながら申しあげます」

家「なんじや伊豆」

伊「紋太郎、清太夫両名、急病さし起こりましてお役勤まりかねるおもむき、願ひいでましたによつて、ただいま帰郷を命じました。おおかた今ごろは薬用手段中かと存じます」

家「おおおらぬのか、どうりで支度が長いと思つた。病氣とあらば是非もない、紋太郎、清太夫には及ばぬ、誰でもよい、乗りあがれ」

いいだしたらあとへはひかぬ將軍家、いならば諸士は心得あると否とを問わず、もし顔を見られて、そちが乗れときた日にはたいへんですから、いずれも下うつむいております。短兵急の將軍家、いささかごきげんなめのていにて、

家「これしきの坂を乗りあがる者はないか、徳川の武は地に落ちたるか。すぎし昔の大西大膳はいかに、明智左馬之助はおらざるか、佐々木樫原はいかに、ええ、いい甲斐なき者どもかな。よいその儀ならば予が自身乗つて見せる」

というど諸角蹴こみ、馬をあおつて円福寺の門内へ乗り入れましたから、いならば諸士の驚きいかばかり。危ない、上さまのお身の上と声をかけますが、近づいて止めることもできず、ど

うしたのかといずれも手に汗をにぎって見ているうちに、はや石段の下まで乗り進めた家光公、山上をおおぎ見た時にはさすがに驚きました。

遠くで見た時にはさほども思われませんでした、側へよって屏風を立てたような石段を見あげて、「なるほどこれはいやがるのも無理はない」とおぼしめしたが、いまさら引くに引かれず、

家「止めるなよ、止めてはならぬぞ」

とおっしゃったが、誰も止める者がありません。さすがの將軍家も心細くなったとみえて、家「止めるなよ、止めてはならぬぞ」

止めろといわぬばかりのお言葉。これを見ておりました諸士が、

○「伊豆殿、上さまだいぶおこまりのこ様子、お止めなされてはいかが」

と申しますが、伊豆守にっこり笑って、

伊「捨ておけい、近ごろの上さまはちとわがままがおすぎだ、こいう時に油をお取り申そう」と、ひどいところで將軍家、油を取られるものです。もうこのへんでよかうとおりをみて伊豆守、ばらばらばらとはせきたり、お馬の轡わづらをしっかとおささ、

伊「こは上さまにはなにごとを遊ばしまするか、君きみは、源氏の長者、征夷大將軍というご大切な御身みみをもつて、かく軽々しくことを遊ばされ、万一御身にけがあやまちにてもござりますれば、なんと遊ばされますや。あまたの大名、馬乗りを養いおくは、なんのためにござるか、かかる時のお役に立てんがためにそうらわずや、まず、まずまずおとどまり遊ばせ」

と、しっかと轡わづらをおさえて止められた時に、將軍家心のうちで、「まあよかった、この男は感

心だ、いまはじまつたことではない、いずでもそうだ」としやれていらつしやる。もつとも伊豆守のいうことはなんでもお聞きになる。それはいけませぬというとぴりつときく。それがために伊豆の山葵は利きがいい、山葵は伊豆が本場だとはあてにはなりませぬ。

家「しからば他に乗る者があるか、予が乗るところであつたぞ」

とおおせられたが、油汗をふきながら、伊豆守に轡を取られて、もとのところへ引きかえしました。

自慢の馬術者すつてんどこう

そこであらためて松平伊豆守殿から、「上さまの上意、諸家において馬術の心得ある者を差しいだし、この石段を乗りあがり、山上の紅白咲きわけの梅花一枝、手折りまいれとの御事、そういう自慢の馬術者にこの儀申しつけるよう」というお沙汰。

ここに当日お供の三十余頭の大小名方においては、おのおの自慢の馬術者を選抜してそれへ出しました。第一番に立ちいでましたのは、土手三番町にお屋敷のあつた、食禄八百石を頂戴し、荒木流の馬術を將軍家へご指南をしております、荒木十左衛門基正という当時有名の先生、つづいて藤堂家の家来山本右京忠重、黒田家の家来加藤勘次郎重正、水戸家の家来関口六助信連、浅野家の家来大坪備前行員、佐竹家の家来鳥居喜一郎重房などという馬術の達人といわれた面々、

ずらりとそこへいならびました。

將軍家はるかにこれをごらんになり、なんでこんなに大勢いるのにでなかったのか、予は寿命を三年ちぢめたとおぼしめされました。やがて伊豆守信綱、大勢の馬乗りの前へ進みいで、

伊「さて上さまのご上意、はなはだもつてご無理のようなれども、このおぼしめしをつらぬかねば、これまた徳川家のご威信にもかかわること、よつてご迷惑ながらけがせぬよう、無事にこの坂を乗りあがり、見事、梅花を折り取つて献上いたすよう、ただしだれかれと指名するは、依怙の沙汰にあいなるによつて、一二三と三本の当たりくじをつくり、当たった者が乗らるるよう、さあくじをお引きなさい」

と、くじをだされたが、一同顔を見合せて、あまりこういうくじにはあたりたくない。そのうちでも、拙者はくじよわい、がこういうくじはえてあたりたがるものでござると、口のなかで法華経を誦するもあり、南無阿弥陀仏となえるもあり、天照皇大神宮と念ずるもあり、いずれもくじを引いてみると、第一番に藤堂家の家臣山本右京忠重、第二番が佐竹家の家臣鳥居喜一郎重房、第三番が水戸家の家臣関口六助信連ときまりました。

ここで山本右京忠重、さつそく身支度をいたし、三春じたての愛馬、八寸にあまれる逸物に、貝摺りの鞍おいて、紺縮緬のたづなをかいぐり、七五三藤締めのみちを持つと、パツパツパツパツと乗りだしました。家光公はるかに「こらんぜられて、

家「おお立派なるふるまい、なにものの家来なるぞ」

○「藤堂の家来、山本右京忠重と申する者にございます」
家「うむ、とうとうのところご苦労じやな」